The Japan Society of Educational Sociology

高校生の「将来の夢」と進路選択

—多様化・個性化時代の進路形成—

日本学術振興会特別研究員　荒川　葉

1. はじめに

本報告は、①学校が個性化・多様化の理念を受容する中で、学校の進路形成機能がどのように変化しているのか、②それによって生徒に対して働く加熱・冷却のメカニズムがどのように変化している可能性があるのか、高校の個性化・多様化政策の動向に焦点を当てて、考察することを目的としている。

これまで日本の学校教育は、一元的な学力に応じて生徒を異なる進路に振り分ける、選抜・配分機関として機能してきた。なかでも、画一的な学科構造のもとに序列化した高校階層構造は、中卒時の学力に応じて生徒を振り分け、高卒後の進路選択の機会を制約する中核的選抜・配分機関となってきた。しかも、日本の学校教育は、新規学卒一括採用の労働市場と結びつき、間断なく生徒を職業構造に移行させるシステムを形成してきた（苅谷　1991）。つまり、大多数の人々を学校からダイレクトに労働市場に配分する巨大な選抜・配分システムとして機能してきたといえる。こうしたシステムは学校が果たす選抜・配分機能を絶対化し、人々を、より威信の高い学校・職業という一元的な成功を目指す「マス競争」にのせていく規範的な役割も果たしてきた。

しかし、こうした学校の選抜システムのあり方も変化している可能性がある。

第一に、学校から職業へのトランジッションが崩れてきている。労働市場の変化も受け、学卒無業者となる層が出てきていることが先行研究によって報告されている。

第二に、これが本発表が強調したい点であるが、個性化・多様化を掲げる教育改革が進行する中で、学校自体が多元的な価値観を取り込むようになっている。一元的な成功観・能力観に基づく選抜配分システムが生徒に与える抑圧を批判する声が高まると同時に、労働市場の変化も手伝い、80年代半ば以降、生徒の「興味・関心」「将来の夢」に応じた学習・進路形成への移行が盛んに推奨されてきた。中でも、中核的な選抜・配分機関となってきた高校は改革の要とされ、多様な学習内容を提供する「新タイプ」の学科・コースが多数設置された。

こうした状況で、学校の進路形成機能はどのように変化しているのだろうか。生徒の「興味・関心」「将来の夢」に応じた学習・進路指導の提供という次元の異なる要素を取り込む中で、高校の学習内容や進路形成機能にいかなる揺らぎが生じているのか。本研究は、個性化・多様化政策が進行するなか、高校教育内容がどのように再編され、選抜・配分機能にどのような質的変化をもたらしているか解明することを試みる。

2. 調査の概要

a. 樋田大二郎ほか97&99&2000年調査
　対象：X県12校、Y県18校、Z県34校
　内容：1）校内文書資料の文献調査
　　2）教員対象インタビュー調査
　　3）生徒対象質問紙調査

b. 発表者実施の98～00年調査
　対象：総合選択制高校1校、総合学科2校
　内容：観察及び1年生対象質問紙調査（5月と11月の2時点館における比較調査）

※調査の概要は当日配布資料にて詳述

3. 分析

①カリキュラムと進路指導の分化

まず、カリキュラムと進路指導に関する大規模調査の結果、改革下、むしろ上位校・中上位校と、中下位・下位校とが、

1）一見多様性を許容しつつ、威信の高い進路をめざす従来型の進路形成に生徒を収斂させていくセクター（上位校・中上位校）と

2）「興味・関心」「将来の夢」に応じた学習・進路選択を許容し、多様な進路形成に生徒を放出するセクター（中下位校・下位校）

に分化する傾向が見られた。

カリキュラムについては、中下位校・下位校では、新タイプの学科・コースを中心に、「興味・関心」「将来の夢」に応じた多様な内容になっているのに対し、上位および中上位では、5教科中心にのカリキュラムが維持される傾向が見られた。

さらに進路指導については、改革下推奨された「将来の職業を考えさせる」指導と従来の「出口保障」を交差させて進路指導のパターンをみたところ、新タイプの学科・コースを中心に「将来の職業を考えさせる」指導を行う傾向が見られたものの、上位と中上位校では将来について考えさせ

NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

ながら大学進学準備に向け意識付けする指導が行われる傾向があるのに対し、中下位・下位校では、「将来何をやりたいのか」考えさせることを重視して「卒業後の進路保障」を必須の目標しない傾向が見られた（詳細は当日配布資料にて）。

②生徒の進路形成の分化

次に上述のようなカリキュラムと進路指導の分化を受け、生徒の進路意識・将来展望にどのような差違が見られるか、生徒対象質問紙調査の結果から考察した。その結果、次の傾向が見られた。

クラスター分析を実施したところ、

クラスター１…「威信追求・猛勉強型」

クラスター２…「夢追求・勉強並行型」

クラスター３…「夢なし・消極的不勉強型」

クラスター４…「夢追求・勉強放棄型」

の４類型が得られたが、クラスター４の生徒の割合は、中下位・下位の「新タイプの学科・コース」で顕著に高まる傾向が見られた。

なお、総合選択制高校１校、総合学科２校における事例調査の結果、こうした進路意識・将来展望の分化は、入学当初から形成されているのではなく異なる進路指導や科目選択指導を経験する中で、次第に形成されていくことも明らかになった（詳細は当日配布資料にて）。

4. 結論—改革下で生じている冷却・加熱のメカニズムの変容について考察

以上の分析の結果は次のようにまとめられる。

まず、改革が進行する中で、高校のカリキュラム・進路指導は、むしろ「威信の高い進路をめざす従来型の進路形成に生徒を収斂させていくセクター（上位校・中上位校）」と「「興味・関心」「将来の夢」に応じた学習・進路選択を許容し、多様な進路形成に生徒を放出するセクター（中下位校・下位校）」に分化する傾向が見られた。

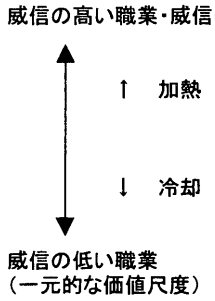
さらに、このようにカリキュラム・進路指導が変化する中で、冷却・加熱のメカニズムも次のように変容している可能性が指摘された（図①）。

かつて、一元的な成功観・能力観に基づく選抜配分システムの下では、すべての生徒を威信の高い進路をめざす一元的な競争に参加させながら、達成可能な地位を悟らせる形の冷却（Cooling down＝縮小）が作用していた。

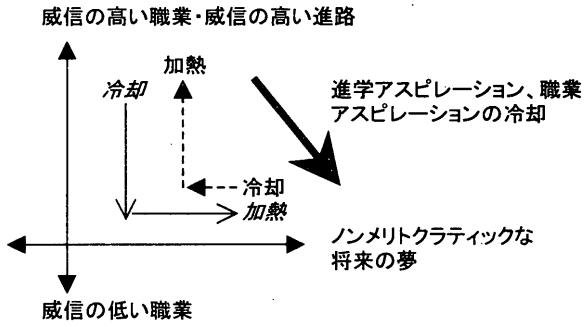
これに対し、個性化・多様化政策に基づくカリキュラム・進路指導の再編の中で、「将来の夢」と「卒業後の進路」が交差する冷却と加熱のメカニズムが生じている可能性が指摘できる。上位校・中上位校では、ノンメリトクラティックな「将来の夢」への＜アスピレーション＞が冷却され、威信の高い進路をめざす進路形成に向けていく加熱・冷却が作動する傾向が見られた。これに対し、中下位校・下位校ではノンメリトクラティックな「将来の夢」への＜アスピレーション＞が加熱され、威信の高い進路をめざす進路形成に対しては冷却される加熱・冷却が作動する傾向が見られた。これを進学アスピレーション、職業アスピレーションという観点から見れば、ノンメリトクラティックな夢に向かって走らせ、威信の高い進路をめざす進路形成から撤退させる Cooling Out 型冷却メカニズムの、中下位校・下位校における組織的な生起と見ることもできる。

図1

1970年代、1980年代の選抜・配分モデル…「Cooling Down」型冷却
（威信の高い進路をめざす競争に参加させながら
達成可能な地位を悟らせる形の冷却）



1990年代の選抜・配分モデル…「Cooling Out」型冷却
（達成経路が明確ではない「将来の夢」にむけて
生徒を引きつけながら業績主義的な競争から撤



※高ランクの高校、普通科高校では ←- の方向に冷却・加熱が作動する傾向があるのに対し、低ランクの高校、特に新タイプの学科・コースでは → の方向に冷却・加熱が作動する傾向が見られる

＜参考文献＞

苅谷剛彦　1991『学校・職業・選抜の社会学』東京大学出版会。

森直人　2002「〈選抜と配分〉をめぐる 1990 年代教育社会学の展開」『社会科学研究』第 53 巻第 1 号。

竹内洋　1995『日本のメリトクラシー——構造と心性』東京大学出版会。

NII-Electronic Library Service